

# 池大雅による遍照光院《山亭雅会図襖》について

関西大学

カラヴァエヴァ・ユリヤ

遍照光院蔵《山亭雅会図襖》は、池大雅の代表作であるにも関わらず、その画題や制作年については不明な点が多い。というのも、遍照光院の火災によって、作品の一部が焼失したため、遺存する襖だけでは物語の内容が分からないからである。そのため、この画題は「山亭雅会図」や「山水人物図」といった曖昧な表記で呼ばれることになった。また、「東林集会」とも呼ばれる断片的な図様からは、「虎溪三笑」の物語を想起させるが、橋のたもとでの高士の笑いは見られない。

さて、《山亭雅会図襖》の制作年をめぐっては、二つの重要な仮説が注目される。まず、遍照光院の歴史に基づく松下英麿による四十代初頭の制作という主張である。もう一つは、作風の特徴と頼春水筆『在津記事』を根拠にした吉澤忠による四十代後半の制作という主張である。しかし、作風の特徴から判断すれば、《山亭雅会図襖》は大雅の個人的な表現を示す実験的な絵画となっており、作風が未だ安定していない時期、つまり、四十代前半の作であると考えた方が適切である。また、《山亭雅会図襖》は、しばしば「文人画的ではない」といわれるのみで、どのような作風なのかが明確に述べられてこなかった。筆者は、複数の手法を組み合わせた実験的作品だと主張したい。つまり、多少とも文人画の特質を示してはいるが、大雅の個性を明白に示す作品で、典型的な文人画だとはいえない作品だということになる。

さらに、この作品については多くの謎が残されている。すなわち、遍照光院の火事をめぐる不明瞭な寺伝、信憑性を疑われる大阪商人に関する逸話、そして、画題をめぐって複数の説が出されるなど、混乱したままである。しかも、従来の研究では種々の説が、資料を上げずに主張されてきた。これについて筆者は、重要な資料として岡田栲軒著『近世逸人画史』を採り上げたい。この著作には遍照光院の火災と大坂商人の話が収録されている。加えて、もう一つの重要な資料は、人見少華著『池大雅』に引用された遍照光院の院主から人見に宛てた手紙である。この手紙には遍照光院の火事と襖の取り付けの話が書かれている。しかし、これら二書においても画題については記されていない。

以上、さまざまに異なる主張がなされてきたが、遍照光院蔵《山亭雅会図襖》については、その制作年や画題について未解決となっている。筆者は、これまで提出された複数の仮説を検討し、岡田栲軒著『近世逸人画史』と人見少華著『池大雅』の文献資料を根拠に、結論として、この作品は大雅の个性的で幅広い美的関心を示す四〇才代前半の制作という説を支持するとともに、これまでの説より一步踏み込んで、「虎溪三笑」の画題を踏まえながら、笑いが生じる前に展開した物語としての「慧遠の訪問」を組み入れた「東林集会」の絵画だと主張したい。